

シャンティ国際ボランティア会だより

〒160-0015 東京都新宿区大京町三二 慈母会館二・三階 ☎〇三―五三六〇―二三三

「人びとに寄り添い進んできた日々」

令和六年能登半島地震支援

シャンティ国際ボランティア会 国内事業課課長 鈴木晶子

令和六年能登半島地震並びに九月の能登半島豪雨でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

二〇二四年元日一六時一〇分、石川県能登地方を震源とするマグニチュード七・六の地震が発生しました。「子どもたちとくつろいでいたときに大きな揺れを感じて、みるみるうちに家が傾き、仏壇の扉が飛んできた」と話す

のは、輪島市門前通り商店街で木工工房を営んでいた男性です。この地震により二六〇名の方が命を落とされ、一二万軒以上の家屋が被害を受けました。内閣府の非常災害対策本部によると一〇月八日時点で、石川県内では今も四九カ所の避難所で三〇〇名以上が生活しています。

SVAは一月六日に職員を石川県七尾市に派遣し調査を開始、一月九日に輪島市より協力要請を受け、一月一〇

日に輪島市門前町に入りました。甚大な被害がありながら支援がほとんど届いていなかったことから、門前町を拠点に活動を行うことを決めました。

発災直後のこの時期、どの避難所でもインフルエンザや新型コロナウイルスが蔓延し、支援する側の行政職員の多くが感染し、人手不足でした。食事の配給はインスタント食品やパンが多く「もう喉を通らない」と話すご高齢の方が、ご自身で食事を準備する姿も多く見られました。そこで、SVAは避難所で炊き出しの実施、足湯やお茶会などのサロン活動、清掃といった避難所運営のお手伝いのほか、福祉避難所を中心に寝具を提供しました。

一ヵ月が経つころ、「車がない高齢者がお風呂に入浴できていない。コミュニティバスの運行も止まっている。なんとかできないか」と行政側から相談がありました。これを受けて、地元の方々やタクシー会社と連携し、入浴・

買い物支援車の運行を開始しました。自衛隊のお風呂に入浴したおばあちゃんから「やっと入れて気持ち良かった。四一日ぶりだよ」とうれしい言葉が聞かれました。

また同じころ、自宅避難者への食事支援がなかったことから、被災した農家民宿のオーナーや飲食店を営むシェフで構成される地元有志グループの方々と協力し、多い日で三〇〇食以上のお弁当を届けました。お渡ししながら生活の様子や困りごとを聞き取り、必要な支援につなげました。受け取った方からは「お弁当をいただくのもとてもうれしが、久しぶりに人に会って元気が出た」「水もない中、大変助かった」との声が寄せられました。

七月以降、SVAは輪島市立図書館と連携し、仮設住宅や公民館を巡回する移動図書館活動を開始しました。本の貸し借りに加え、お茶を飲んだりお話をするサロンも同時に開催し、少し

でも安心していただける場づくりを目指しています。サロンで久しぶりに再会された方の間で「元気にしてた?」「何とか生きとったわ」「仮設どこにおるの?」「近いやん!」といった会話が聞かれました。

SVAが活動する門前町の平均高齢化率は六四％を超えており、さまざまな場面で高齢の方に寄り添った活動が必要です。たとえば入浴支援の場面で、お一人で入浴できない方のサポートを行う。炊き出しでは「外部の炊き出しの料理は味付けが濃い」「食材が大きすぎて噛み切れない」「ごはんの量が多い」という声があったため、メニューや量・食材の大きさに配慮する、などです。仮設住宅に入居された方からは「みんな似ていて自分の家かわからない」という声も聞かれます。

一方、移動図書館活動に参加された七〇代の女性は「こころ辺の人は農家やけど今は仮設住宅だからすることが



お茶を飲みながらお話もできる移動図書館

なくなりました。今まで本は読んだことなかったけど一晩で小説を読み終えたよ。夢中になるもんやね」と話しており、このほかにも新しい暮らしに向き合う姿が多く見られます。復興が遅々として進まない中、引き続き地元の方の声を聞きながら、支援活動を続けてまいりたいと思います。

シャンティ国際ボランティア会だより

〒160-0015 東京都新宿区大京町三二 慈母会館二・三階 ☎〇三―五三六〇―二三三三

能登半島地震

～過疎地での復旧・復興～

シャンティ国際ボランティア会 副会長 茅野俊幸

能登半島地震の復旧、復興に向け歩を進めていた奥能登は九月二一日の大雨により再び災害に見舞われてしまいました。地震で地盤が緩んでいる中で大雨により「複合災害」として、再び道路や水道が被災し、一部地域は仮設住宅の浸水被害も受けて二度の避難所生活を送ることになった方もいらっしゃいます。一時は多くの人の心が折れそうになっていました。それでも、引き続き復興に向け、地元の方々を支

えるべく各ボランティア団体が役所関係機関と連携し支援活動が続いています。

あらためて、SVAとして一月一日に発生した能登半島地震から今までの支援活動を振り返りながら、過疎地の地震と今後の動きにも触れたいと思います。

SVAでは、一月一日の地震発生後、一月六日にスタッフ一名を初動調査として派遣。私ともう一名のスタッ

フが一月九日に合流し七尾市内の避難所での物資配布、炊き出しを行い、一月二日には總持寺祖院の在る輪島市・門前町公民館避難所での運営支援、炊き出し調整等にあたることになりました。

当初、避難所は避難所長さんがインフルエンザで倒れ不在の中、公民館主事さんと対口支援（各地から一週間交代で派遣される自治体職員）で避難者の日常管理が行われており、運営に回る人手が少ないこともあり、私たちは運営の支援にも関わりました。避難者の人数確認、トイレ掃除、断水の中の水の補給、日々の物資の搬入、新型コロナウイルス・インフルエンザ感染者の隔離、DMAT（災害派遣医療チーム）や巡回看護師と連携しての高齢者のケア等々、一月～二月末までは避難所運営で手が届かないところへのサポートも行いました。

一月末からは一二日間孤立集落と

なっていた七浦地区の高齢者の方々に
向けて、買い物・入浴支援タクシーを
走らせました。日本海に面した七浦地
区は震災後、高齢化率が七三・九%と
なり、要支援、要介護に加え認知症の
高齢者も多い集落で、避難先から車で
四〇分近くかけて、スーパーへの買い



自衛隊の方と入浴調整をする筆者（右） 撮影：川畑嘉文

物、自衛隊風呂への入浴をサポートし
ました。「震災から三八日ぶりにお風
呂に入れて幸せ!」という声も出るほ
どニーズは高く、五月末までこの支援
は続きました。

また、セントラルキッチンとして地
元飲食関係の方々と連携し自宅避難の
方々への配食支援、福祉避難所への炊
き出しと環境改善、瓦礫の撤去、全国
曹洞宗青年会の皆さんの炊き出し調
整、總持寺祖院との物資配布調整、禅
の里交流館でのサロン活動等々、震災
から半年は多岐に渡る支援を行ってき
ました。

現在は、輪島市からの要請により、
仮設住宅に向けての移動図書館活動と
お茶会サロン活動を行っています。集
まる方々のほとんどが高齢者の方々
で、本を借りながらお茶を飲み、震災
後の再建不安や仮設住宅での独り暮らし
の不安等々、お互いの近況を語り合
う「場」として大切な時間です。



地元の方々と配食支援の準備をする筆者

能登半島地震の支援活動の現場に
入って強く感じたことは、特に奥能登
は過疎地の中で災害が起き、復旧段階
で人口がさらに流出し、残る人々でこ
の地を復興していかなければならない
ということです。人口が少ない中でど
う復興を進めていくか? 地元は悩み

も多いですが、注目されているのが関係人口です。関係人口とは、例えば、能登に愛着をもって週末だけ来てお手伝いをしたり、奥能登に魅力を感じて二地域居住をしたり、農家なら農繁期をお手伝いして冬は都市部で過ごすしたりする人々を指し、単なる経済的な指標だけでなく、人々のつながりやその地域と多様に関わる人々を増やすことで復興へつなげていくことです。実際、関係人口を増やしての復興への取り組みは、二〇〇四年の新潟県中越地震後の新潟県山古志村や二〇一年の東日本大震災で原発被害に遭った福島県飯舘村で進んでいるとの報告もあります。

SVAが支援を続けてきた輪島市門前町でも地元の方々が、関係人口を増やす取り組みを考えています。また、三年前に復興を果たし、今回の地震でも大きな被害を受けた總持寺祖院については、震災後、祖院安居OBの

方々、各地の宗侶や曹洞宗青年会の方々等による復旧ボランティアの協力もあり、一部拝観も可能となりました。

今後、被害を受けた伽藍の復興に向け宗門内でも動きがあると思いますが、門前町の住民には六〇〇年以上「ごほんさん」として親しんできた總持寺祖院の復興を切に願っています。

被災された方々からは「總持寺祖院の復興なくして、門前町の復興はない」という声が多く聞かれます。それだけ、總持寺祖院と門前町は長い歴史を共に歩んできました。

SVAとしての支援活動は、一二月末を一区切りとしていますが、總持寺祖院の復興も含め、門前町の住民との関わりについては、今後も関係人口として訪れることになると思います。

お経のしおり 『修証義』

好評頒布中

『修証義』を章ごとに解説した5種類のリーフレットです。法要の意義や修証義全体の解説付き。各章単品・5章まとめてのご購入も可能です。

三ツ折 210mm×100mm
各1部44円 5章セット200円
100部以上1割引



☞ご注文は曹洞宗ブックセンターへ 0120-498-971